

コ ラ ム

訪 中 所 感

56年9月、57年10月にたまたま中国訪問の機会に恵まれ、中国の文化、政治、工業、研究機関の一部をかいまみることができ、そして製鉄関係の技術者研究者の一部の方々と親しく接し多くの友人を得ることができた。

56年の初めての訪中の印象と57年の二度目の訪中の印象とで少し異なつた点があることと、二回の機会を踏まえて初めて感じたことなどの一、二の所感について述べてみたい。

中国の文化については、初回の北京、承徳の印象においてとにかくその文化の長い歴史の重さ、深さに圧倒され、また日本の文化の源流あるいは日本文化のふるさとの感を深くしたものである。しかし、今回は東洋文化の共通の基盤の上にたつての中国文化と日本文化の違い、特に日本文化の特徴について上海、杭州、北京をめぐるながら感じた次第である。たとえば中国の文化の一つの特徴として、「広大さ」と表現するとすれば、日本の京都苔寺の杉苔のつややかさとか日本料理のうるし塗りの椀の蓋をとつた中にゆずの香りとともにさつぱりした色どりの具を少し底に沈ませたすまし汁などにみられる「こまやかさ」を、日本の文化の特徴として感じられ、前回とは逆に両国の文化の「違い」について今回は強く感じた。

工業、政治の流れについてはその全貌については短い期間で知る由もないが、北京の街並および人々の風俗が1年間でかなりの変化をしていること、そして何

人かの中国の人達の口から「文革後6年」という話を聞いて自分なりに感じたことがある。日本の工業、政治が終戦を原点として戦後何年ということとその発展をふりかえつて物を考えていたように、中国での原点はまさに文革後であることを強く感じた次第である。そして考えなおしてみると戦後6年にしてもう既にこれだけのことができているという感じと、その立上りの勾配の大きさは大変なものであるという考えに至つた。

特に製鉄技術の発展に対してはヨーロッパ、北欧、アメリカ、日本の全世界の最先端技術をまな板の上に乗せ、その中から一番いいもの一番自分達に適合するものを熱心にかしこく選択をしていることを特に今回感じた次第である。

従つて中国の戦後(文革後)10年、15年後には相当なレベルになることが推定できると共に、ふりかえつてそのまな板に乗せられた技術として日本の研究成果、日本の生みだした技術がどの程度中国において中国の戦後10年、15年に生かされあるいは採用されて行くかということは、我々の現在の研究、技術が本物であるかどうかの評価になるのではないだろうか。

そしてこれは単なるコマーシャルの話ではなく、工業にあらわれた文化の一つとして自分達のレベルと歴史への貢献の可能性の証明になるのではないかと考え、少なからぬ危惧と日頃とは少し異なつた角度からの現在の仕事に対するインパクトを感じた次第である。

(住友金属工業(株)鹿島製鉄所 丸川雄浄)

編 集 後 記

▶粗鋼生産高が昭和57年度は11年振りに一億tを割り込むことが確実視されて、鉄鋼業は波瀾の新年を迎えることになりました。これまで鉄鋼生産が順調に伸びてきた20年間の間に、鉄鋼を取りまく環境は大幅に変化しました。新幹線、オリンピック、くるま社会といった躍進的鉄鋼生産の状況から、生産源の拡散、素材多様化、高度化・情報化社会といった熟年の鉄鋼生産の状況へとバックグラウンドが大きく転換してきております。鉄鋼会社の社長の年頭所感にも、「需給の均衡、貿易秩序」「新しき挑戦、国際化」「合理化努力、技術力研鑽」などこの厳しい困難を乗り越えて生き抜く姿勢がうたわれております。新技術の研究開発の目標設定にも従来路線の延長だけではない新しい局面が必要となつてきております。

▶北海道大学のキャンパスで行われた第104回講演大

会は質・量とも大変充実して無事終了しました。記念講演3件、一般講演844件、討論会講演33件(5テーマ)で約1200名の参加者を数えました。広々としたスペース、抜けるような青い空と澄み切った空気の下で連日最終論文まで熱心な講演と討議が行われました。大会実行委員会の委員各位と関係の方々の大変な御苦勞を厚く感謝いたします。懇親会には300名、ジュニア・パーティーには250名が参加し“Boys be ambitious to Sapporo beer”と時の経つのを忘れて歓談がはずみました。

▶一転して厳しい環境の下で開かれる次回以降の講演大会を質的に充実してゆき、一人でも多くの参加者が集まれる魅力のある大会にするよう一層の努力を続けたいものです。

(K.K.)